

Yogabhāṣya III-17 (上)

和 田 悠 元

I. はじめに

ヨーガ学派の根本聖典とされ、パタンジャリ (Patañjali) なる人物⁽¹⁾に帰される『ヨーガスートラ』(*Yogasūtra*=YS)には数種の註釈書が著されたが、その中でも5種の復註が著されるなど、⁽²⁾後続の思想家から重視された『ヨーガパーシュヤ』(*Yogabhāṣya*=YBh)は現在でもYSの読解に不可欠な書となっている。このYBhのIII-17において、著者ヴィヤーサ (Vyāsa, ca. 540-650 A.D.)⁽³⁾が一般に文法学派 (vaiyākaraṇa) の所説と認識されているスポータ説 (sphoṭa-vāda) を取り入れていることは、1911年に初めて指摘されて以来、⁽⁴⁾その是非も含めて、諸学者の関心を集めてきた。スポータ説は、「語 (śabda) とは何か」という古典インドの言語哲学における最も根源的なテーマに関わる重要な理論であるが、一般に正統的インド六派哲学でスポータ説を承認するのはヨーガ学派だけであるといわれている。⁽⁵⁾本稿はその論拠となりうるこのYBhの当該箇所を全容を解明することを目的としている。

古典インドの言語哲学に関しては、従来諸学者により活発な議論・研究が展開され、現代語訳も多数公表されている。本稿では、そのような事情を考慮し、先行諸訳を提示・解釈するなどして、古典インドの言語哲学の一端を闡明してみたい。論述の次第としては、スポータ説の発生の端緒となる「語 (śabda) の本質」論に関して、文法学派や他学派の所説によってスポータ説の輪郭を鮮明にした上で、当該箇所の所説を仔細に検討したい。

II. 古典インドにおける「語 (śabda) の本質」論

古来、インドにおいては、ヴェーダ聖典の解釈・伝承という目的も相俟って、多くの思想家たちにより言語に対する分析・解釈が盛んに行われてきた。周知のように、紀元前4世紀頃の文法学者パーニニ (Pāṇini, ca.4c BCE) はその主著『八章篇』(*Aṣṭādhyāyī*) においてヴェーダ補助学 (vedāṅga) の一つである

文法学 (vyākaraṇa) を極めて緻密かつ簡潔な文体で体系化して古典サンスクリット文法を確立した。それに対する註釈書であるパタンジャリ (Patañjali, ca.150 BCE) の『大註解書』(Mahābhāṣya=MBh) はそれを高度な思弁をもって哲学的に発展させた。

古典インドにおける言語に対する問題意識の枢要は、MBh の冒頭に現れる牛 (gauḥ) を例に取った「語とは何か」というあまりにも有名な問いに端的に現れている。

(i) *atha gaur ity atra kaḥ śabdaḥ* / MBh p.1

(1a) Now, what constitutes the word in *gauḥ*? (ABHYANKAR & SHUKLA [1975] p.5)

(1b) Maintenant dans “*gauḥ* (boeuf)” qu'est-ce qui est le mot? (FILLIOZAT [1975] p.15)

(1c) さて, <gauḥ> (牛) というこの場合, 語とは何か. (服部 [1989] p.41)

(1d) さて, 牛 (gauḥ) という場合, 語 (śabda) とは何ぞや? (拙訳)

この MBh の極めて短い問いを契機として, 以後諸学派間で活発な議論が展開してゆくのであるが, MBh はこの自問に対して, 以下の様に自答する。

(ii) *yena^uccaritena sāsna-lāṅgūla-kakuda-khura-viṣāṇinām sampratyayo bhavati sa śabdaḥ* // MBh op. cit.

(2a) Word is that which, when uttered, gives rise to the knowledge of objects possessed of dewlaps, tails, humps, hoofs and horns. (ABHYANKAR & SHUKLA [1975] p.6)

(2b) Ce par quoi, prononcé, il y a représentation des objets qui possèdent un fanon une queue, une, bosse, des sabots et des cornes, est le mot. (FILLIOZAT [1975] p.22)

(2c) それが発声されれば, 頸下の垂肉・尾・背上の隆起・蹄・角をもつものの観念 (sampratyaya) が生ずるものが語である. (服部 [1987a] p.181)

(2d) それが発声された (uccarita) ことによって, 喉袋 (sāsna) ・尾 (lāṅgūla) ・背 (kakuda) ・蹄 (khura) ・角 (viṣāṇā) を持つものの観念 (sampratyaya) が生ずるところのもの, それが語 (śabda) である. (拙訳)

下線で示したように, この一文から, MBh は語 (śabda) を, それが発せられることによって対象への「観念が生ずるもの」と理解していることがわかる。観念 (sampratyaya) が生ずるというのは, 意味／対象 (artha) が理解されるということであり, この定義に従えば, 語 (śabda) とは意味を理解させるもの (arthapratyāyaka) ということになる。しかし MBh はそれに続いて, 別の定義

を提示する.

(iii) *atha vā prafūta-padārthako loke dhvaniḥ śabda ity ucyate* / MBh op. cit.

(3a) Or, in other words, word is that sound from which there arises the knowledge of things in affairs of the world. (ABHYANKAR & SHUKLA [1975] pp.6-7)

(3b) Ou bien, sens bien connu dans le monde, le son est appelé śabda. C'est ainsi que l'on dit à quelqu'un qui fait du bruit. (FILLIOZAT [1975] p.22)

(3c) もしくは、世間においては、[それに基づいて] 意味対象物が理解される、[そうした] 音声 (dhvani) が「語」(śabda) であると言われる。(拙訳)

下線部のように、語が音声の意味するというのは、MBh の例を用いれば、「声を出せ」(śabdāṁ kuru)、「声を立てるな」(mā śabdāṁ kārṣṭh)あるいは「この少年は声を発する」(śabda-kāryaṁ ayaṁ māṇavakaḥ)⁽⁶⁾ というように、一般に語(śabda)は音声(dhvani)の意味でも認知されているからということである。

このように MBh においては、語の定義は二説が並記された状態にあるが、その後文法学派の中でもひととき異彩を放つ⁽⁷⁾バルトリハリ (Bhartṛhari, ca. 450-510 A.D.) の出現によって発展を遂げることになる。彼はヴェーダーンタ哲学の影響を受け、⁽⁸⁾ 主著である『文章単語論』(*Vākyapadīya*=VP) の「ブラフマンの章」(*Brahma-kāṇḍa*) と称する第 1 章の冒頭偈において、

「無始無終 (anādi-nidhana) にして言葉を本質とし (śabda-tattva)、⁽⁹⁾ 不壊なるもの (akṣara) であり、世界 (jagat) の形成 (prakriyā) の元 (yatas) であるブラフマン (brahman) は、意味 / 対象 (artha) として化現する (vivartate).」⁽¹⁰⁾ という、後に「語ブラフマン論」(śabdabrahma-vāda) などと呼ばれる独自の説を提唱し、さらに第 44 偈において、先の語の二説に言及する。

(iv) *dvāv upādāna-śabdeṣu śabdau śabda-vido viduḥ* /

eko nimittaṁ śabdānām aparokṣeṣe prayujyate // VP I-44 //

(4a) 使用さるゝものたる諸の語に関して、二種の語あり、と語の学者たちは知れり。一つは諸の語の（意味を理解せしむる基となる）原因 (nimitta) にして、他は（表示せらるゝ）意味 (artha) の意に用いらる。(中村 [1956] p.225)

(4b) Parmi les éléments verbaux fondamentaux, les experts en retiennent deux, l'un qui est cause des paroles (elles-mêmes), l'autre qui sert à (l'expression) du sens. (BIARDEAU [1964] p.87)

(4c) In the words which are expressive the learned discern two elements: one is the cause of the real word which, the other, is used to convey the meaning. (IYER [1965/1995r] p.52)

(4d) Grammarians consider that there are two ‘word-entities’ (ie, two elements) in functional words; one (ie, the sphoṭa) is the cause of the (production) of words and the other (the speech-sound) is used in connection with meanings. (PILLAI [1971] p.9)

(4e) 言語学者たちは、〔意味（＝対象）の〕把握の用具であるさまざまなことば (upādāna-śabda) において、二種の語を認める。一方は諸々の語の原因 (nimitta) であり、他方は意味に対して適用される。(服部 [1987a] p.182)

(4f) The Vaiyākaraṇas consider that there are two types of Śabdās in functional words, one (Vaikhary) is the cause (which enlightens) of the other Śabda (Sphoṭa). (SUBRAHMANYAM [1992] p.29)

(4g) 〔意味＝対象〕を^{ウパ・ダー・ナ・シヤブダ}理解させるものとしての語には、「語」〔として〕二つ〔の側面〕があると言語学者たちは知る。(1) ひとつは、〔実際に発せられる〕諸々の具体的音声の発効原因であり、(2) もうひとつは、意味＝対象〔の表示のため〕に使用される。(赤松 [1998] p.99)

(4h) Zwei Wörter kennen die Wortkenner bei Wörtern, die zum Gebrauch dienen; eins ist der Anlaß für die Wörter, das andere wird im Sinne einer Bedeutung verwendet. (RAU [2002] p.11)

(4i) 言語学者 (śabda-vid) たちは、〔意味／対象を〕理解させる語 (upādāna-śabda) に、二種の語があると知っている。一つは諸々の語の原因 (nimitta) であり、もう一方は意味／対象 (artha) に対して使用される。(拙訳)

「〔意味／対象〕を理解させる語」(upādāna-śabda) は明らかに前述 (ii) の MBh の「観念を生じさせるもの」を意味し、「諸々の語の原因」(nimitta) というのは実際の音声を意味していると考えられる。即ちバルトリハリの言う二種の語は明らかに MBh の所説に関連していると言えるであろう。

VP に対するバルトリハリの自註 (svavṛtti), あるいはハリヴリシャバ (Harivṛṣabha) なる者の手によともされる⁽¹¹⁾ Vṛtti ではパタンジャリより古い文法学者であるヴィアーディ (Vyāḍi, 年代未詳)⁽¹²⁾ の『集成書』(Saṃgraha) の所説として、「〔意味／対象を〕理解させる〔語は、意味／対象の〕表示者

(vācaka) である」⁽¹³⁾という説を提示する。この意味／対象の表示者としての語は単一不可分 (avibhakta) なものでなければならない。何となれば、字音 “g”, “au”, “ḥ” のいずれかのみによってでは「喉袋等を持つ動物」を表示することはできないからである。このことは既にパタンジャリによっても示唆されている。

(v) *gaur iti yāvad ga-kāre vāg vartate na^au-kāre na visarjanīye / yāvad au-kāre na ga-kāre na visarjanīye / yāvad visarjanīye na ga-kāre na^au-kāre* / MBh p.365

(5a) When the speech is in g, it cannot be in au and ḥ; when it is in au, it cannot be in g and ḥ, and when it is in ḥ, it cannot be in g and au. (KUNJUNNI RAJA [1963/2000r] p.107.)

(5b) When the speech is in ‘g’, it cannot be in ‘au’ and ‘h’ when it is in ‘au’, it cannot be in ‘g’ and ‘h’ and when it is in ‘h’ it cannot be in ‘g’ and au’. (RATHORE [2000] p.48)

(5c) “gauḥ” という場合、発声器官 (vāc) が g 音に存在する限り、au 音とヴィサルガ (visarjanīya=ḥ) には存在せず、au 音に [存在する] 場合は g 音とヴィサルガには [存在せず]、ヴィサルガに [存在する] 場合は g 音と au 音には [存在しない]。 (拙訳)

この箇所における英訳 2 種は “vāc” を “speech” と訳しているが、日本語の語感として理解するのはやや困難であるように思われる。拙訳では「発声器官」という訳語を与えたが、その場合、サンスクリット語としては、刹那単位で発声器官 (Nom.) が音節 (Loc.) に存在するというニュアンスが表現されていると考えられる。⁽¹⁴⁾

つまり “gauḥ” という場合に、g 音を発声した瞬間には au 音とヴィサルガはまだ生じておらず、au 音を発声した瞬間には g 音は既に消滅してヴィサルガはまだ生じておらず、ヴィサルガを発声した時点では既に前の二音は消滅しているということであり、このような部分的な字音が集合しただけでは「喉袋等をもつ動物」を表示すること、即ち意味／対象を理解させることはできないと考えられる。故に意味／対象の表示者としての語は単一不可分でなければならないのである。このような単一不可分な語こそがバルトリハリの言うスポータ (sphoṭa) であり、音声 (dhvani) とは対置されるものである。

“gauḥ” が述べられる場合、話者の観念の中に単一不可分な概念 “gauḥ” があり、それが “g”, “au”, “ḥ” という具体的な音声の順序的な発声によって開顕

(√sphuṭ)⁽¹⁵⁾されるのである。聴者は開顕された“gauḥ”を聞くことで、その意味／対象を理解するのである。⁽¹⁶⁾

Ⅲ. ミーマーンサー学派のスポーツ説批判

このように、具体的な音声以外に単一不可分な語を認めるスポーツ説に対しては、ミーマーンサー学派によって批判が為された。『ミーマーンサー सूत्र』(Mīmāṃsāsūtra) に対するシャバラスヴァーミン (Śabarāsvāmin, ca.550 A.D.)⁽¹⁷⁾の註釈書 (Śābarabhāṣya=ŚBh) には、ある註作者 (Vṛttikāra) の所説として、以下の様な一文が引用されている。

(vi) *atha gaur ity atra kaḥ śabdaḥ? --- gākāra-aukāra-visarjanīyā iti bhagavān upavarṣaḥ / śrotra-graḥaṇe hy arthe loke śabda-śabdaḥ prasiddhaḥ / te ca śrotra-graḥaṇāḥ / ŚBh p.38*

(6a) (Erwiderung:) Was ist, wenn man „Kuh (gauḥ)“ sagt, dabei das Wort? --- (Die Laute) g, au, und h; so sagt der ehrwürdige Upavarṣa. Denn im täglichen Leben gilt das Wort „Wort“ für einen durch das gehör erfaßten Gegenstand. Und die (Laute) werden durch das Gehör erfaßt. (FRAUWALLNER [1968] p.39)

(6b) When one utters [the word] cow, what is Śabdaḥ here? Bhagavān Upavarṣa answers: ‘[The syllables] g, au, h.’ For in daily life the word Śabdaḥ is used for the ‘thing’ that is grasped with the help of the ear. And the [syllables] are grasped by the ear. (D’Sa [1980] p.78)

(6c) さて、<gauḥ>(牛) というこの場合、語とはなにか。g 音、au 音、ヴィサルガ (h) であると尊師ウパヴァルシャ (Upavarṣa) は言う。なぜならば、「語」ということは聴覚器官によって捉えられるものを意味すると世間に周知されており、そして、それら〔の音節〕は聴覚器官によって捉えられるからである。(服部 [1987a] p.190)

(6d) さて、牛 (gauḥ) という場合、語とは何ぞや? g 音と au 音とヴィサルガであると尊師ウパヴァルシャ (Upavarṣa) は [言う]。何となれば、「語」(śabda) という言葉は聴覚器官の把握対象 (śrotra-graḥaṇa) を意味すると世間においてよく知られているからである。(拙訳)

このように Vṛttikāra はウパヴァルシャ (Upavarṣa)⁽¹⁸⁾の言葉を引いて、語とは聴覚器官によって捉えられる具体的な音声、すなわち音節 (字音 varṇa) であることを主張する。

しかし、前述のように、スポーツ論者の論理に従えば、刹那単位で生滅する音節の個別的な把捉では意味を理解することはできないということになる。そのため註作者はこの箇所を引き続いて、スポーツ論者からの「個々の音節 (eka-eka-akṣara) を認識するときには意味／対象 (artha) は把捉できないので、意味／対象の観念 (artha-pratyaya) が生じない」というこの主張に対して為される反駁を紹介し、⁽¹⁹⁾そして (v) の MBh の主張のように音節の集合を否定し、意味／対象を理解させる「牛という語」(go-śabda), すなわちスポーツがあるという反論者 (= スポーツ論者) の主張を想定する。

註作者はこの主張に対して、「前の字音によって生ぜられた潜在印象 (saṃskāra) に伴われた最後の字音が [意味／対象を] 理解させるもの (pratyāyaka) であるというのは誤りではない」と再反論し、あくまでも字音以外の語を容認せず、⁽²⁰⁾「単語は諸々の字音に他ならない」⁽²¹⁾という結論を言明するのである。

このように、相互に相手の所説を批判し合う形で、スポーツ論者 (sphoṭa-vādin) と字音論者 (varṇa-vādin) の「語の本質」を巡る論争が展開されてゆくのである。この論争は特に7世紀以降に活況を呈し、字音論に立つミーマーンサー学派の学匠クマーリラ (Kumārila, ca. 650-700 A.D.) は ŚBh 第1篇第1章に対する評釈である『偈評釈』(Ślokavārttika=ŚV) の「スポーツ論」(Sphoṭa-vāda) 章において、スポーツ説に対して鋭い批判を加えた。それに対して、初めは彼の弟子で、後にヴェーダーンタ学者 (vedāntin) に転向したと伝えられる思想家マンダナミシュラ (Maṇḍanamiśra, ca. 675-725)⁽²²⁾は『スポーツの論証』(Sphoṭasiddhi=SS) において ŚV の詩節を引用して反論している。

また、ヴェーダーンタ学派の高名な学匠シャンカラ (Śaṅkara, ca. 700-750 A.D.) もその著『ブラフマストラパーシュヤ』(Brahmasūtrabhāṣya=BSBh) I-3.28 においてスポーツ説批判をおこない、先の「語とは字音に他ならない」というウパヴァルシャの主張もその典拠として挙げられている。⁽²³⁾金沢篤氏によれば、シャンカラは「śabda の実質を varṇa とし、śabda を具現するものとして Veda を位置づけ、śabda に神秘的な力を付与する可能性を孕む sphoṭa 論には与」⁽²⁴⁾しなかったとされる。この金沢氏の所説を敷衍するならば、同じヴェーダーンタ学派であっても、マンダナミシュラが SS を著してある意味でスポーツ説に与するような立場を取ったのに対して、シャンカラは正統的な vedāntin としての矜持を保ったとも言えよう。その点に関して、BSBh の当該箇所を虚心に読む限り、金沢氏の所説は全く妥当であると筆者も考えるが、そ

の場合、この BSBh の著者シャンカラと YS の復註である『ヨーガーストラパーシュヤ註解』(*Yogasūtrabhāṣyavivaraṇa*=V) の著者シャンカラが同一人物であるのか否かという問題が別の検討課題として挙げられねばならないであろう。何となれば、V の著者は本稿の主題でもある YBh III-17 に対する註解において、ŚV の *Sphoṭavāda* 章から 6 偈を引用し、文法学派の所説に基づいてクマールイラによるスポータ説批判に対して論駁しているからである。⁽²⁵⁾ このことは長年結論を見ないこの問題に関して、別人説の強力な論拠として挙げられるであろう。

このように、これまでの検討で明らかになった古典インドにおける語 (*śabda*) の本質論とそれに関わるスポータ説を踏まえて、以下においては、それがどのように YBh III-17 の中に敷衍されているのかを検討したい。

(続)

Bibliography

ABHYANKAR, K. V. & SHUKLA, Jayadev Mohanlal

[1975]: *Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya*, Āhnikas 1-3, with English Translation and Notes, Research Unit Publications, No.1, Bhandarkar Oriental Research Institute: Poona.

[1977/1986r]: *A Dictionary of Sanskrit Grammar*, Gaekwad's Oriental Series, No.134, Oriental Institute: Baroda.

ĀRANYA, Swāmī Hariharānanda

[1963]: *Yoga Philosophy of Patañjali*, University of Calcutta: Calcutta.

ĀŚRAMAPANDITA

[1978]: *Pātañjalayogasūtrāṇi*, Ānandāśrama Sanskrit Series 47, Ānandāśrama: Poona. (=YS, YBh, TV)

BABA, Bangali

[1976/1979r]: *Yogasūtra of Patañjali*, Motilal Banarsidass: Delhi.

BIARDEAU, Madeleine

[1958]: *Sphoṭa Siddhi (La Démonstration du Sphoṭa)*, Publications de L'Institut Français D'Indologie No.13, Institut Français D'Indologie: Pondichéry. (=SS)

[1964]: *Vākyapadīya Brahmakāṇḍa, avec la Vṛtti de Harivṛṣabha*, Traduction, Introduction et Notes, Publications de L'Institut de Civilisation Indienne, Série in 8°, Fascicule 24, Éditions E. de Boccard: Paris.

D'SA, Francis

[1980]: *Śabdaprāmāṇyam in Śabara and Kumārila*, Towards a Study of the Mīmāṃsā Experience of Language, Publications of the De Nobili Research Library, Volume VII: Vienna.

ELIADE, Mircea

[1969]: *Yoga: Immortality and Freedom*, Translated by Willard R. Trask, Bollingen Series LVI, Princeton University Press: Princeton.

FILLIOZAT, Pierre Sylvain

[1975]: *Le Mahābhāṣya de Patañjali*, avec Le Pradīpa de Kaiyaṭa et L'Uddyota de Nāgeśa, Ahyāya 1 Pāda 1 Āhnika 1-4, Publications de L' Institut Français D'Indologie No.54, I, Institut Français D'Indologie: Pondichéry.

FRAUWALLNER, Erich

[1968]: *Materialien zur Ältesten Erkenntnislehre der Karmamīmāṃsā*, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse Sitzungsberichte, 258, Band 2, Abhandlung, Hermann Böhlau Nachf. Wien. (=ŚBh)

HARIMOTO, Kengo

[1993]: *Pātañjalayogaśāstravivaraṇa* 3.17, *Sphoṭasiddhi* k.27 and *Brahmasūtrabhāṣya* 1.3.28, in *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 41-2, pp.1138-1136: Tokyo.

IVER, K. A. Subramania

[1965/1995r]: *The Vākyapadīya of Bhartṛhari with the Vṛtti*, Chapter I, English Translation, Deccan College Building Centenary and Silver Jubilee Series 26, Deccan College Postgraduate and Research Institute: Poona.

[1966]: *Sphoṭasiddhi of Maṇḍana Miśra (English Translation)*, Deccan College Building Centenary Series 25, Deccan College Post-graduate and Research Institute: Poona.

[1966/1995r]: *Vākyapadīya of Bhartṛhari*, with the Commentaries Vṛtti and Paddhati of Vṛṣabhadeva, Kāṇḍa I, Deccan College Monograph Series 32, Deccan College Postgraduate and Research Institute: Poona. (=VP)

[1969]: *Bhartṛhari*, A Study of the *Vākyapadīya* in the light of the Ancient Commentaries, Deccan College Building Centenary and Silver Jubilee Series 68, Deccan College Postgraduate and Research Institute: Poona.

JACOBI, Hermann

[1911]: The Dates of the Philosophy of the Philological Sūtras of the Brahmins, in *Journal of the American Oriental Society*, 31-1, pp.1-29: New York.

JHA, Ganganatha

[1907/2011r]: *Yoga-Darśana*, comprising The Sūtra of Patañjali and Bhāṣya of Vyāsa, Dev Publishers and Distributors: New Delhi.

[1964]: *Pūrvamīmāṃsā in its Sources*, Second Edition, Library of Indian Philosophy and Religion I, Banaras Hindu University: Varanasi.

[1987]: *Tattvasaṅgraha (English Translation)*, Vol.1, Gaekwad's Oriental Series No.80: Baroda.

JOSHI, K. L.

[2007]: *The Brahmasūtra Śāṅkara Bhāṣya*, with the Commentaries; Bhāmataī, Kalpataru and Parimala, Parimal Sanskrit Series No.1, Parimal Publications: Delhi. (=BSBh)

KIELHORN, F & ABHYANKAR, K. V.

[1962]: *The Vyākaraṇa-Mahābhāṣya of Patañjali*, Third Edition, Vol. 1, Bhandarkar Oriental Research Institute: Poona. (=MBh)

KUNJUNNI RAJA, K.

[1963/2000r]: *Indian Theories of Meaning*, Adyar Library and Research Centre: Chennai.

KRISHNAMACHARYA, Embur

[1984]: *Tattvasaṅgraha of Śāntaraksita with the Commentary of Kamalaśīla*, Gaekwad's Oriental Series No.30: Baroda. (=TS)

LEGGETT, Trevor

[1990/2006r]: *Śāṅkara on the Yoga Sūtras*, A Full Translation of the Newly Discovered Text, Motilal Banarsidass: Delhi.

PANDEYA, R. C

[1963]: *The Problem of Meaning in Indian Philosophy*, Motilal Banarsidass: Delhi.

PILLAI, K. Raghavan

[1971]: *The Vākyapadīya*, Critical Text of Cantos I and II with English Translation, Summary of Ideas and Notes, Studies in the Vākyapadīya Vol.1, Motilal Banarsidass: Delhi.

PRASĀDA, Rāma

[1912/2010r]: *Patañjali's Yoga Sūtras*, with the Commentary of Vyāsa and the gloss of Vācaspati Miśra, Munshiram Manoharlal Pubrishers: New Delhi.

RATORE, Usha

[2000]: *Sphoṭasiddhi of Maṇḍana Miśra (A Critical Study)*, Vidyanidhi Prakashan: Delhi.

RAI, Ganga Sagar

[1993]: *Śloka-vārttika of Śrī Kumārila Bhaṭṭa*, with the Commentary Nyāyaratnākara of Śrī Pārthasārathi Miśra, Ratnabhārati Series-4, Ratna Publications: Varanasi. (=ŚV)

RAU, Wilhelm

[1977]: *Bhartr̥haris Vākyapadīya: die mūlakārikās*, Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, Band. 42, 4, Steiner: Wiesbaden.

[2002]: *Bhartr̥haris Vākyapadīya*, Versuch einer vollständigen deutschen Übersetzung nach der kritischen Edition der Mūla-Kārikās, Abhandlungen der Geistes- und sozialwissenschaftlichen Klasse Einzelveröffentlichung, Nr.8, Akademie der Wissenschaften und der Literatur: Mainz.

RUKMANI, T. S.

[1987]: *Yogavārttika of Viṣṇūānabhikṣu*, Vol. 3; Vibhūtipāda, Munshiram Manoharlal Publishers: New Delhi.

[2001]: *Yogasūtrabhāṣyavivaraṇa of Śāṅkara*, Vol. II; Vibhūtipādaḥ and Kaivalyapādaḥ, Munshiram Manoharlal Publishers: New Delhi.

SASTRI, Polakam Sri Rama & SASTRI S. R. Krishnamurthi

[1952]: *Pātañjala-Yogasūtra-Bhāṣya-Vivaraṇam of Śāṅkara-Bhagavatpāda*, Critically Edited with Introduction, Government Oriental Manuscripts Library: Madras. (=V)

SUBRAHMANYAM, K.

[1992]: *The Vākyapadīyam of Bharṭṛhari – Brahmakāṇḍa*, English Translation, Sri Garib Dass Oriental Series No.46, Sri Satguru Publications: Delhi.

WADA, Yūgen

[2012]: A Note on the *Āsana* in Yoga-śāstra, in *Annual Report of the Zen Institute*, No.24: Tokyo.

WOODS, James Haughton

[1914/1966r]: *The Yoga-system of Patañjali*, Harvard Oriental Series Vol. 17, Motilal Banarsidass: Delhi.

赤松明彦

[1998]: 『古典インドの言語哲学』 1, 東洋文庫 637, 平凡社: 東京.

伊原照蓮

[1965]: 「ヨーガ派のスポーツ説」, 『密教文化』 74, pp.1-11: 高野山.

加藤龍興

[2007]: 『Yogaśāstravivaraṇa の研究—著者問題と翻訳を中心として—』, 駒澤大学博士学位論文, 私製: N.P.

金倉圓照

[1949]: 『印度中世精神史 上』, 岩波書店: 東京.

[1980]: 『シャンカラの哲学—プラフマ・スートラ釈論の全訳—』 (上), 春秋社: 東京.

金沢篤

[2013]: 「ヴェーダーンタ学派の「語からの生起」—シャンカラの所説を中心に—」, 東方学会第 58 回国際東方学者会議シンポジウム I における配付資料.

佐保田鶴治

[1980]: 『解説 ヨーガ・スートラ』, 平河出版社: 東京.

中村元

[1955]: 『ヴェーダーンタ哲学の発展』, インド哲学思想第 3 卷, 岩波書店: 東京.

[1956]: 『ことばの形而上学』, インド哲学思想第 4 卷, 岩波書店: 東京.

[1995]: 『ミーマンサーと文法学の思想』, 中村元選集 [決定版] 第 26 卷, 春秋社: 東京.

服部正明

[1973]: 「Mīmāṃsāslokavārttika, Apohavāda 章の研究」 (上), 『京都大学文学部研究紀要』 14, pp.1-44: 京都.

[1987a]: 「インド言語哲学における人間観」, 『東洋における人間観』 (前田専学編), 東京大学出版会, pp.181-200: 東京.

[1987b]: 「Yogabhāṣya III-17」, 『東方學會創立四十周年記念 東方學論集』, 財団法人東方學會, pp.649-665: 東京.

[1989]: 「4 言語と意味の考察 1 総論」, 『インド思想 3』, 岩波講座東洋思想第 7 卷, pp.40-57, 岩波書店: 東京.

本多恵

- [1978]: 『ヨーガ書註解―試訳と研究―』, 平楽寺書店: 京都.
 [1998]: 『クマーリラの哲学』 (下), 平楽寺書店: 京都.
 [2007a]: 『ヨーガ経註 上巻―真実無畏―』, 平楽寺書店: 京都.
 [2007b]: 『ヨーガ経註 下巻―心統一批判―』, 平楽寺書店: 京都.

湯田豊

- [2006]: 『ブラフマ・スートラーシャンカラの註釈 (上) 一』, 大東出版社: 東京.

和田悠元

- [2011]: 「brahman と śabdatattva」, 『インド論理学研究』 II, pp.109-121: 東京.

註

- (1) この人物が MBh の作者であるパタンジャリと同一人物であるという説も存するが, その論拠は 11 世紀を遡り得ず, 判然としない. Cf. 本多 [2007a] pp.15ff.
- (2) 本多 [2007a] pp.28-30.
- (3) 本多 [2007a] p.28.
- (4) JACOBI [1911] p.28.
- (5) 中村 [1956] pp.259-260, 伊原 [1965] p.1.
- (6) tad yathā / śabdaṃ kuru / mā śabdaṃ kārṣiḥ / śabda-kāryaṃ māṇavaka iti / dhvaniṃ kurvann evaṃ ucyate / tasmād dhvaniḥ śabdaḥ // MBh p.1
- (7) 中村 [1995] p.327.
- (8) 中村 [1956] pp.55ff.
- (9) 筆者は以前, この śabda-tattva という複合語の解釈について少しく論じたことがある (和田 [2011]). そこで筆者はこの複合語について, 仏教の論師シャーンタラクシタ (Śāntarakṣita, ca. 725-784 A.D.) が『真実綱要』(Tatvasaṅgraha=TS) においてこの VP I-1 を紹介している偈 (TS 128) の解釈と, 彼の高弟カマラシーラ (Kamalaśīla, ?-797) によるその箇所 の註釈の記述を援用して, バフヴリーヒ複合語 (Bahuvrīhi-compound) による解釈が妥当であると論じたのであるが, いかに文法学者といえども語 (śabda) をインドにおける最も根源的な実在であるブラフマン (brahman) より本質的な階層に位置せしめられるか, 現在ではやや懐疑的である. シャーンタラクシタやカマラシーラという仏教の論師による解釈以外にバフヴリーヒ複合語説を補強する有力な解釈が存在しないというのもその要因である. 本稿においては主題から逸脱する危惧から, この問題に関する詳細な再検討を割愛し, 訳文も当時のまま掲載したが, 筆者としては, 赤松 [1998] 等の主張するタトプルシャ複合語 (Tatpuruṣa-compound) や (cf. 赤松 [1998] pp.243-240), カルマダーラヤ複合語 (Karmadhāraya-compound) を含むあらゆる解釈の可能性を俎上に載せて, 今一度当該偈を虚心に読み直してみる必要性を感じていることを言明しておきたい.
- (10) anādi-nidhanam brahma śabda-tattvam yad akṣaram / vivartate[^] artha-bhāvena prakriyā jagato yataḥ // VP I-1 //
- (11) Cf. IYER [1969] pp.16-36.

- (12) 中村 [1956] pp.33-34; cf. 赤松 [1998] pp.278-277.
- (13) vācaka upādānaḥ... (IYER [1966/1995r] p.101)
- (14) 議論を先取りする形にはなるが、後述する YBh III-17 冒頭に「このうち、発声器官 (vāc) は諸字音 (varṇa) においてのみ (eva), 意味を有する (arthavat)」(tatra vāg varṇeṣv eva^{arthavati} / YBh p.137) という一文が見える。この直後の文に、「聴覚器官 (śrotra) の対象 (viśaya) が音 (dhvani) の変化一般 (pariṇāma-mātra) である」との記述があるため、この一文において、音節 (varṇa) に対して有効である“vāc”は「発声器官」であると解釈するのが妥当であると考えられる。さらにこの一文における“vāc” (Nom.) と“varṇa” (Loc.) の格 (case) も先の MBh の引用文 (v) と一致している点も注目すべきであろう。このことからこの引用文 (v) に現れる“vāc”は「発声器官」として解釈されるのが妥当であると推認されよう。
- (15) そもそも「スポータ」(sphoṭa) という語は √sphuṭ (開く・開顕する・明瞭になる) という動詞語根の過去受動分詞形である。
- (16) Cf. VP I-48~50 and *Vṛtti*.
- (17) 中村 [1955] pp.189-222.
- (18) 中村 [1955] pp.34-55, 705-726.
- (19) yady evam, artha-pratyayo na^{upapadyate} / ---katham?--- eka-eka-akṣara-vijñāne hy artho na^{upalabhyate} / ŚBh p.38
- (20) pūrva-varṇa-saṃskāra-sahito^{antyo} varṇaḥ pratyāyaka ity adoṣaḥ / *ibid*.
- (21) tasmād akṣrāṇy eva padam / ŚBh p.40
- (22) 現在は否定されているものの、彼は最初クマーリラの弟子であり、後にヴェーダーンタ学派のシャンカラとの討論に敗北してその弟子になり、スレーシュヴァラ (Sureśvara) と改名したと伝えられてきた。しかし彼には『ブラフマンの論証』(*Brahmasiddhi*) という著作があることから、ヴェーダーンタ哲学に関する造詣も深く、ヴェーダーンタ学者 (vedāntin) としても当時有名であったようである。Cf. 中村 [1955] pp. 248-251.
- (23) varṇā eva tu śabdaḥ iti bhagavān upavarṣaḥ / BSBh pp.324-325.
- (24) 金沢 [2013] p.6.
- (25) V p.268; cf. ŚV V-11.131~136.